

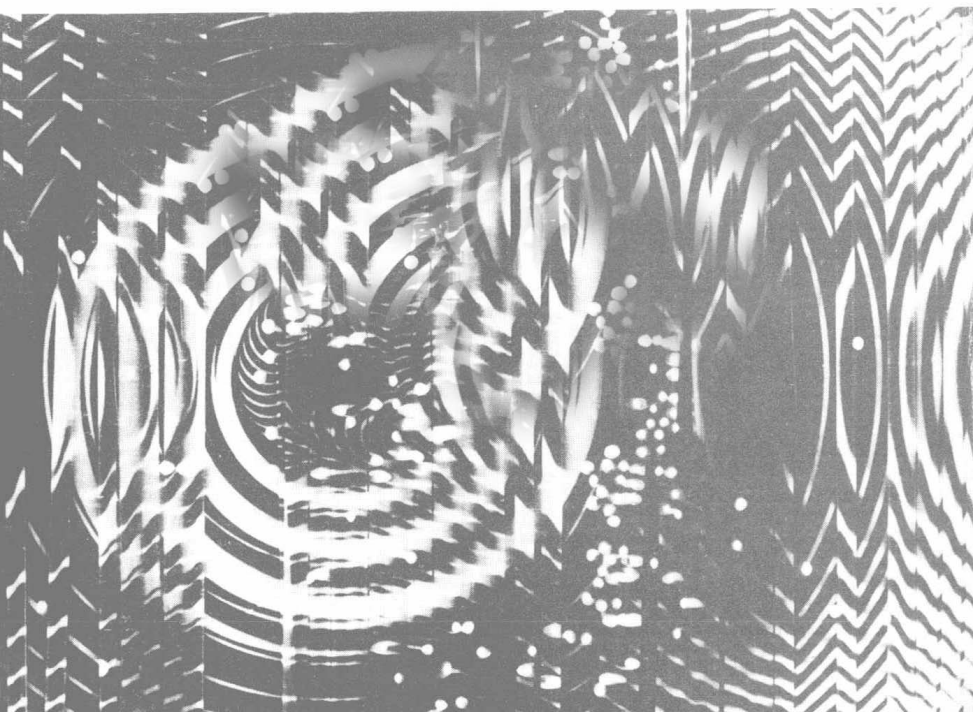
にせドン・ファン

吉行淳之介

青樹社

淳之介

セドン・ファン





にせドンファン

著作者〓吉行淳之介

発行者〓土井 勇

発行所〓株式会社 青樹社

東京都千代田区三崎町二一六―七 郵便番号一〇一
電話東京二六四―六九〇二・二六四―六九〇四 振替東京四七六四八

印刷所〓有限会社 八光印刷

製本所〓土開製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替え致します

◆定価・発行日はカバーに表示してあります

にせドンファン

目次

にせドンファン

五

あしたの夕刊

八

長い崖道

九

北からの贈物

三

にせドンファン

1 二つの部屋

広い電車通りの両側には、商店が並んでいる。藥屋、洋品店、パチンコ屋、肉屋、と並んでいるその隣が玩具屋である。四月中旬のこと、玩具屋の飾窓は、武者人形で占領されていた。

一台のタクシーが、その玩具屋の角を曲がった。狭い道を三十メートルほど走って、停まると、一人の男が降りた。周囲は閑静な住宅地のたたずまいで、表通りの賑わいは少しも伝わってこない。

男は、灰色の背広を着ている。仕立ての良い、イギリス製の布地で、チョッキを着けている。頭髪を劃然と左右に分け、細い鉄縁の眼鏡をかけている。

道端で、男はゆっくりと煙草に火をつけて、タクシーの走り去るのを待った。何気ない様子で周囲に眼を配り、やがて小じんまりしたアパートの中に姿を消した。

Q大学の英文科助教授花岡文雄——、それが男の職業及び姓名である。二十九歳という年齢から考

えても、俊才であることがわかる。Q大学の英文科を優秀な成績で卒業、そのまま研究室に残り、助手、講師、助教授の階段を異例のスピードで登った。

こういうタイプの男性は、小説や評論の分野でも才筆を示すことが多いが、彼は一切そういうことはしない。学生時代にちょっと同人雑誌に関係して、一篇の小説を書き、才能を注目されたが、以後は筆を絶った。その集まりからも、姿を消した。

「花岡というのがいたが、あいつはその後どうした」

「もう小説は書かぬと言ってるらしい」

「それは、惜しいな」

そんな会話がその集まりで取り交わされていることが、彼の耳にも伝わってくる。それは彼の自尊心をくすぐる。

「あれは若気のあやまちだった」

と、彼は自分が一篇の小説を書いたことをそうおもう。

「あんな、野暮な作業は、もう二度とする気はしない」

そして、そうおもうことが、また彼の自尊心をくすぐるのである。

それは……、とさらに彼はおもう。一篇の小説で有名になることも起こり得る世の中である。もしも有名になってしまつて、自分の顔がテレビに映し出されたり、写真となって新聞や雑誌に載せられたりすることになったら、世間が狭くなつてしまう。

そんなことは、まっぴらだ、と彼は思っていた。

花岡文雄は、アパートの部屋で、壁に掛けられた大きな鏡に、自分の姿を映している。

部屋のドアほどの大きさの鏡で、銀色の細い枠に嵌められている。枠には装飾はない。鏡の中の自分に、彼は押し殺した笑いで、笑いかける。満足そうな笑いだ。頭髮に指を突っ込んで、軽く掻き乱す。

眼鏡をはずして、部屋の隅の整理箆笥のヒキダシに入れる。胡桃材の重厚な箆笥である。そのとき、春の匂いがした。官能をくすぐる匂いである。

整理箆笥の上の、黒いガラスの三角錐の形をした花瓶に、沈丁花の一束が投げ込まれてある。匂いは、そこから漂ってくる。その花は、志津子という女が、どこかの垣根から折り取ってきて花瓶に入れたものだ。

「あの女も、無事に結婚してくれることになった」

と、彼は口の中で呟き、ふたたび鏡の前に戻ると、今度は思い切り顔を崩して、満足そうに笑った。

笑いで細くなった眼が、元に戻る。先刻まで眼鏡のレンズの下に隠されていたときには、学究の徒にふさわしい沈んだ光を示していた眼が、不意に官能的な光を湛えはじめた。

彼の眼鏡のレンズには、度が無い。素透しガラスである。助教授としての彼は、けっして眼鏡を他人には触らせない。

銀色の枠の大きな鏡は、花岡文雄の全身を映している。背は高いが、一メートル八〇もある偉丈夫ではない。彼は自分の背が高すぎなかったことに、感謝している。目立ち過ぎると、困るのである。

目鼻口とその配列も、抜群の美男子というわけではない。しかし、奇妙な魅力があつて、狙った女は必ず彼に惹き寄せられてゆく。

志津子も、その一人だ。

「さて——」

彼は、周囲を見まわした。べつに意味があるわけではなく、次の行動に移る前のエア・ポケットに似た時間が、彼を訪れたわけである。

ほとんど調度品も、装飾も無い部屋である。濃い赤色の絨毯の敷きつめられた床と、大きな鏡と、胡桃材の箆笥とその上の花瓶、それに窓側の壁面全部をおおうシルバー・グレイのカーテン。それ以外は、書棚も絵も何一つとして無い。

しかし、貧寒とした感じはしない。一つ一つには金がかかっているが、際立った趣味の統一があるわけでもない。投げやりなようにみえるが、じつは何も置かず、趣味に凝り過ぎず、というところに彼の狙いがあるのかもしれない。

板製の仕切り障子の向こうが寝室で、この部屋には木製のセミ・ダブルのベッドが一つと、サイド・テーブルが一つ置いてあるだけ。ベッド・カバーは、これはどうしたわけか、紺がすり模様の布が使われている。

彼は灰色の背広を脱ぎ捨て、押入れを開いた。押入れの中に、大きな木の箱がある。その中に、彼は背広を収め、嚴重に鍵を掛けた。

そして、押入れの中に乱雑に突っ込んであった衣服を取り出し、身に纏いはじめた。茶色のコールテンの背広とフラノのズボンを無造作に着た彼の姿は、先刻までのQ大学助教授花岡文雄とは別人にみえた。

ファッション画家か、デザイナーのようにみえる。その自分の姿を鏡に映し、彼はもう一度鏡の中の自分に頷いて、部屋を出た。

建物の横手にある駐車場から車を出し、ハンドルを握った。学校へ自家用車で乗りつけるのは、いろいろの点で差障りがあるので、彼はそのときにはタクシーを使う。

三十分後、花岡文雄は、街のスタンドバーに腰掛けて、ウイスキーを飲んでいた。

白服のボーイばかりで、女性従業員のいない酒場である。気易い感じで、女だけの客がカクテルを口に運んでいる光景も、時折り見受けられる店だ。

彼は腕時計を見た。

五時三十分である。

六時に、志津子とこの店で会う約束になっていた。彼は、わざと三十分ほど早目に待ち合わせの場所に来た。また一人の女と無難に別れることができた……、その満足感を噛みしめて味わう時間を、

一人だけで持ちたいとおもったからだ。

その前の日、彼は自分のアパートの部屋で志津子を抱いた。それで互いにこたわることなく別れる筈だった。そのとき、志津子が言った。

「明日、もう一度だけ会って頂戴。あたしが結婚してから生活してゆく場所を、見ておいてもらいたいの」

志津子は、見合いで結婚の相手をきめた。相手は、地方に家庭のある財産家の青年である、と言う。その青年は、志津子と結婚するにあたって、いろいろ準備をするためにしばらくの間帰郷している。その間に、志津子は新しい生活を送るためのアパートを捜すことを一任され、相当額の金を渡された、と言う。

「その人は、あと三、四日したら戻ってくるの。だから、その部屋を見るのは、花岡さんが最初の男性というわけよ」

「しかし、その部屋を見たって、仕方がないじゃないか」

「でも、やっぱり見ておいてほしいの」

詰らぬ、女らしい感傷だ、と彼はおもった。しかし、逆らってはいけない、折角無難に別れることができるこの際だから、別れは丁寧にしておくことにしよう。

彼は、同意した。

待ち合わせの場所を、その酒場にしたのは、そこで一年前に初めて志津子に会ったからである。客

として、その酒場に現われた志津子に、彼は会ったのだ。

その酒場のスタンドに腰掛けて、彼は志津子との一年間を思い返していた。

「志津子と別れるのは、もともと難しいことではなかったのだ。最初からそういう話し合いの上での交際だった。いつでも好きなききに、別れることができた筈だ、だから、かえって一年間もつづいたといえる」

彼は、ドンファンを気取っていたわけでもない。ただ、一人の女性に束縛されるのが厭なのである。志津子よりもはるかに厄介な関係の女と、それまでに幾人も巧みに別れてきた。別れることに巧みなのは、ドンファンの資格である。したがって、彼をドンファンと考えている女性は、何人かいることになる。

その方針を、生涯つづけてゆくかどうかは、彼にとって未定である。ただ、少なくともあと数年間は、一人の女性に束縛されるつもりはない。三十数歳での結婚は、現代においてはけっして晩婚ではない。

もちろん、Q大学助教授としての花岡文雄は、ドンファンとは遙かに遠い男として、慎重に振る舞っていた。むしろ、女性関係には臆病な男にみえた。唯、彼の慎重さには、「でも、どうでもいいんだ」という感じが含まれている。折角、大学教授への道が開かれているのだから、自分からその道を塞ぐことはない。しかし、その地位に必死に執着する気持ちもない。

彼の父親は、多額の遺産を残して亡くなっていた。控え目に費えば、一生食べてゆける額である。

大学を辞めても、慌てることはない。

この「でも、どうでもいいんだ」という一種投げやりな気分が、助教授花岡文雄にある感じを与えていた。そのある感じのために、彼は女子学生に人気があった。露骨に接近しようとする学生もいた。しかし、彼は女子学生を全く相手にしなかった。

自分の学校の女子学生と関係をもてば、面倒なことになるのは、歴然としている。だいいち、周囲の眼から二人の関係を隠すだけでも、かなりの神経を使わねばならぬ。

そんなことは、まっぴらだ、と彼はおもっている。

彼の腰掛けている場所から、酒場の入口の扉が見える。

その扉が開いて、志津子が姿を現わした。細面のすらりとした軀つきだが、胸が大きくふくらんでいるのが衣服の上からでも分かる。顔は日本風のしとやかさだが、その胸のふくらみはむしろふてぶてしくみえ、その不均衡に彼は惹かれた。

一年前、彼がその酒場で飲んでいたとき、一人の若い女が入ってきた。一見して、そういう場所に馴れぬB・G風の女性と分かったが、彼の近くに腰掛けて、ウイスキーを飲みはじめた。酒に馴れていない女が、苦いのを我慢してあふっている飲み方である。

その飲み方や、表情で、その女の置かれている状況の推測が付いたので、彼は声をかけてみた。

「そんなお酒の飲み方をしていると、悪い男に欺されますよ」

「そんな飲み方って？」

問い返す声には、すでに酔いが感じられた。

「そうだな、たとえて言えば、いま男と別れてきたような……。別れるといっても、デートして別れてきたのじゃなくて、長い別れ、というか、縁を切った、というか……」

「あら、分かるかしら」

「分かるとも、それも、あまり別れたくない相手だったようですね」

その女は黙って、彼の隣の席に移ってきて、その先を促がするような眼をした。それで、彼は自分の半ば出まかせの言葉が当たったことが分かった。

「そういうときには、気持ちの一部分に空白なところがあるものです。どうなってもいい、といううな、自分で自分を虐めたいような部分もある。つまり、危険な状態にいることになる」

「……」

「だから、悪い男に欺されやすい、というわけです」

「そうね、こわいわね」

「こわいですよ」

そして、その夜、彼はその「悪い男」になった。その女が、志津子である。

しかし、彼は悪い男にはなったが、欺したわけではない。果物の皮を剥くように、彼は志津子の衣服を取り払い、その大きくふくれた胸を露わにさせながら、言った。

「ぼくは、結婚する気持ちはない。だから、きみとも結婚しないが、それでいいね」

志津子は、黙って頷いた。

「きみは綺麗な人だから、これからいくらでも結婚の申し込みを受けるだろう。適当な人が現われたら、結婚するといいいとおもう。ぼくはその間のツナギの役目をしよう」

そして、彼は一年間、そのツナギの役目をした。

一年後のその夜、彼は志津子としばらくの間、その酒場でウイスキーのグラスを口に運んだ。

「やはり、これから、きみの新しいアパートを見に行くのか」

「ええ」

「億劫になってきたなあ」

「駄目よ、一緒に行ってください」

その一年間、志津子がこれだけ強い調子で自分の意見を主張したのは、初めてのことだ。

彼はあきらめて立ち上がった。一種の儀式を行ないに出かける気持ちになった。我慢するんだ、それが済めば、自由の身になれる、と、彼は自分に言い聞かせた。

志津子の案内したアパートは、小じんまりした二階建だった。

「良いところが見付かったね。ぼくのところよりも、ずっと良さそうだ」

「そうかしら」